

部会・委員会報告

〈医用画像システム部会〉

DICOM Standards Committee (中国四川省成都市) 参加報告



DICOM 委員会 委員長 鈴木 真人 (東芝メディカルシステムズ(株))

1. はじめに

DICOM 規格を管理保守している DICOM Standards Committee (DSC) が2008年4月11日に中国四川省成都市にて開催され、JIRA 代表としてこれに参加したので報告する。

2. DSC の位置づけ

DSC は DICOM 規格の制定・保守、および個別の Working Group (WG) の活動に関して全体的な監督と方向付けを行う最高議決機関である。すでに広範な範囲をカバーしている DICOM 規格であるが、技術の進歩に合わせた新たな手技や情報の追加定義、そして膨大なページ数になった本文のスペルミスの修正、よりわかりやすい言い回しへの変更などの修正が随時行われている。

大きな修正は担当すべき WG から New Work Proposal (NWP) として DSC に提案され、その修正に着手すべきかが挙手によって採決される。小さな修正は Correction Proposal (CP) として WG (多くは気づいた個人) から提示され、修正内容を DSC で確認してからメンバー全員に対して事務局から投票 (Ballot) のメールで告知される。

このように規格の大きな変更からスペルミスの修正まで、すべて DSC が投票にかけることを承認し、最終的に全メンバーの投票結果によって DICOM 規格に反映されるという非常に民主的なプロセスを維持している。ただし DSC は年3回の開催なので、WG-06 (Base Standard) がその隙間を埋めるように積極的な会合を開いている。

3. アジア地区2008年 DICOM Standards Committee

DSC は北米・欧州・アジアの3地域でそれぞれ年1回、合計3回開催される。2007年3月の台湾に続いて2008年4月に中国四川省成都市 (Chengdu) にて DSC2008 が開催された。今回の DSC は4月8～10日の2008 DICOM International Conference and Seminar に引き続いて4月11日に開催されたが、中国本土での初の開催にあたり Conference と DSC の設営に中国側として成都技術大学が中心となってご尽力頂いた。



写真1



写真2 DICOM INTERNATIONAL CONFERENCE

DSCにはいつものメンバーが集まったが、やはり中国内陸部ということでいつもなら複数人が参加するベンダも代表者一名に絞っての参加が多かったように思える。

日本からはソニー株式会社の狩野氏、富士フイルム株式会社の中島氏と JIRA 代表として小職が参加した。Emmanuel Cordonnier 氏が議長を務め、MITA の Howard 氏が事前準備された資料をもとに手際よく案件をこなしていくのはいつもの見慣れた風景である。

今回の中心的な議題の一つに、実質的にデファクトスタンダードとなった DICOM をより多くの人に普及させるための戦略、具体的には国際規格団体や関連学会などいかに協調して行くかに多くの時間が費やされた。まず DICOM 規格本文を各国語に翻訳するときの留意点を規格自体に含める提案（しかもその文言を英語以外にいくつの言語で書くかなど）が NEMA 法務部からなされた。方向としては了承し、詳細を再度法務部から提案してもらうことになった。

また DICOM 自体を ISO などの規格に取り込んでもらうことは既に行われているが (Web Access to DICOM Persistent Objects (WADO) がその一例である)、DICOM のように年に何回も追加・変更・修正される規格は、文面が固定できずいわゆる規格文書とするには運用面で難しい点が多いと感じた。ISO では TC215 専門委員会のいくつかの WG が医用通信規格と密接に関わった動きをとっている。これらの活動に DICOM を管理する DSC、HL7 を管理する HL7 協会、そのほか各地域の団体が積極的に参加している。

DSC の管轄する各 WG の報告では DICOM 規格文書自体の XML 化、レポートの定型化 (テンプレートの定義)、動画圧縮の標準化など DICOM をより使いやすくするための新たな作業の提案とその進捗が報告された。前回の DSC では大容量メディアとして Blu-Ray と HD-DVD の 2 本立てでと言う話が出ていたが、後者が市場から撤退したので規格自体はシンプルになる予定である。

また DICOM が規格化している PDI (Portable Data for Imaging) に従った CD メディアが各国の診療所や病院の間で受け渡されるようになってきたが、ACR (American College of Radiology) から実際に運用すると種々の問題が発生しているとの報告があった。DICOM としては器であるメディアの仕様 (物理的仕様とデータ構造の論理的仕様) を定め、いくつかの利用例 (Use Case) を提示している。しかし、実際には種々雑多なデータの書き方がされているようで、受け取った医師が有効利用するのに難儀しているという報告であった。CD

による医用画像の受け渡しは日本国内でも一部で普及が見られるが、やはり当事者の方々から同じような不満が寄せられており、何らかのガイドラインの提示が必要と感じた。これもベンダとユーザをカバーしたセミナーなどで健全な普及を図っていくべき項目と思う。

また、各国報告において日本からは JIRA Report で前回 DSC (2007年11月 RSNA) 以降の国内活動と、ISO/TC215会議の参加報告を行った。

いつものように盛りだくさんの議題をこなしたのち、来年のアジア地区での DSC は2009年4月に京都で行うことを再確認して閉幕した(2008年度は6月ドイツと12月米国での開催が決まっている)。

JIRA は2009年度アジア地区 DSC 開催ホストとして4月20、21日に京都東急ホテルの予約等準備をすでに始めている。無事開催できるように努力しているので、今後とも関係者皆様方のご協力をよろしくお願いしたい。



写真3 四川料理の夕食会

追伸：DSC が成都市で開催された丁度1ヵ月後に四川大地震が発生し、成都市周辺にも大きな被害が出ました。心よりお見舞申しあげます。